年間第１３主日

福音朗読　マルコ５・21-43

2024.6.30 9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

この間、つい最近から、今年初聖体を受けた人たちが侍者の奉仕をしてくださっています。そのようにして奉仕してくれる人たちが増えていくのはほんとに嬉しいなあと思いますけれども、侍者のお仕事、いろいろ子どもたちはリーダーに習ったと思います。ろうそくを持つこととか、何か道具を祭壇上に運んで行くとか、やり方を習ったと思いますけども、侍者の仕事で最も大切なことはなんでしょうか。考えて欲しいんです。

それぞれ、これは重要ではないということはなんにもないけど、侍者のどんな役割も、ろうそくを持つ役の人も、カリスとかを祭壇に持って行く、そういう役の人も、すべての侍者が共通して果たしている一番大切な役割っていうのがあるわけです。それが何かっていうのは、今日の今朗読しました福音書の中にヒントが出てきます。侍者の役割を果たしている人たちが今日の福音の中に出てきます。講座だったら「みんなで考えてみよう」って時間を取りますけども、ミサの中だったら時間がないので答えを言えば、名前が出てきます。「ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネ」（マルコ５・37）、そのイエス様の三人の弟子たちが、イエス様が死んでいる少女に触れて立ち上がらせる、その場面のイエス様と一緒に行って――でもその弟子たちが何かをしているわけではないんです、でもイエス様がその少女に触れて「タリタ、クム」と声を掛けて、起こす、それを目撃している、そういう者としてこの三人の弟子がいます。

それが侍者のお仕事の一番大切なこと、つまりこのごミサの中でイエス様がなさることを見るっていうことが、イエス様が確かに働いていらっしゃるっていう信頼のうちに見るということが、侍者の基本的な仕事なんです。だから何か持って行くとか道具を持つとか、そういう役がないときでも、「見る」っていう大切な仕事があるんです。そういう意味では、まだ侍者の係になっていない、初聖体を受ける前の子どもたちも、あるいは今日は侍者服を着て祭壇の周りに並んでいない子たちも、侍者の仕事はもうすでにしていると言うことができます。そして、それは教会に集められたわたしたち一人ひとりの役割でもあります。イエス様の救いのみ業の目撃者となる、ということです。

では、そのイエス様は何をなさるのでしょうか。それも今日の福音書の中に出てきました。今度は、大人の人で長い間血が止まらないっていう――そういう病気って聖書に出てきましたけども、それは現代の病気で言えば何病かとかいうことではなくて、「血」っていうのは聖書の中の表現では「命が宿るもの」っていう、そういう意味だから、それが流れ出して止まらないっていうのは、生きる力が湧いてこない、そういう状態です。それはいろんなことを思い浮かべることができるんです。必ずしも体の病気だけではない。また逆に、体の病気を患っている人でも、それを担いながら自分自身を生きている方もいらっしゃるわけです。

でも、生きる力がいろんな形で湧いてこない、そういう状態を解決してくれる人をいくら捜し回っても、それは見つけることができない。そういう１２年間苦しんでいたっていう状態の中に見て取ることができます。でも、イエス様に触れた。そして力を得た。どういうことなのか？　イエス様がその人に言います。「あなたの信仰があなたを救った」（マルコ５・34）。これは、洗礼を受けたらとか、教会に所属したらとか、そういうような個別的なことではない。イエス様が言いたいのは、「あなたを救う力は、あなたの中にあったのだ」ということです。イエス様は決して「あなた、誰のお陰で救われたと思いますか？　わたしのお陰ですよね。わたしから離れてはずうっと生きることができないんですよ」って、恩着せがましくは言わない。イエス様のお陰、力が働いて、なんだけど、でもイエス様がおっしゃるのは、「その救いは、あなたの中にその救いに到達する、それを受け取る力があった。今それにあなたは出会ったんだ」っていうことを「あなたの信仰があなたを救った」っていう聖書的な表現、そして言葉になっていると言うことができます。

イエス様との対話っていうのは、自分自身に出会っていく歩みだと言えると思います。それは、まず自分自身を困難を乗り越える力とともにお造りになった神様に出会うことでもあり、そして神様がお造りになった本当の自分自身に出会うことです。そのためにずうっと絶えずともに歩んでくれる方として、わたしたちのそばにいらっしゃるのがイエス様なんだと、そして古い自分から新しい自分へと生まれ変わっていく力を――誰かこの困難を解決してくれる人はどこにいるのか、自分に代わってこの人生の重荷を担ってくれる人はどこにいるのかということを捜し続けるのではなく、それは自分の中にある、もうすでにいただいていたんだっていうことに、イエス様と、どんなときにもわたしたちと歩み対話してくださる方と出会うことを通して出会っていくのだと思います。

そして、そのように一人ひとりが中に神様の力を見いだし、それが力強く芽生えてくるのをお互いに関心を持って見守り続けるというのが、信仰者同士のまた大切な一つのつながりと言うことができます。

だから、侍者は、これからイエス様がくださるまことの食べ物、御聖体拝領のときにも一緒にいます。それは、落っことさないかとか、あるいは洗礼を受けてない人がもらわないかを監視するということが第一ではなくて、イエス様が一人ひとりの中にいただいている恵みに出会わせようと心に触れるために入っていらっしゃる、その瞬間を目撃するためにずっと見つめるっていうのが一番基本的な役割だと思います。

誰にも見られていない、誰も関心を持って自分を見ないんだっていうことが人間から力を奪うんじゃないかなあと思います。でもイエス様は絶えず見続けてくださっている。その見続けてくださっているイエス様の姿を、互いに関心をもって、そして神様の恵みへの信頼をもって見つめ続けるっていうことが、わたしたちの聖徒の交わりと言いますか、信者のつながりと言うことができます。

わたしたちは、聖体拝領の――儀式の中ですけど――の瞬間に、また互いの日常の信仰生活で、他の人々に神様が働かれるっていうことを信頼して、お互いに見つめることがあるでしょうか。それとも、自分の問題の中だけにずうっと、自分だけしか見てないということがないでしょうか。わたしたちがここに集められたのは、偶々(たまたま)、便宜的に、みんなで一緒に聖体拝領したほうが速いからっていうことじゃないですね。お互いに、ペトロやヤコブ、ヨハネのように、そこに一人ひとりの中に働かれるイエス様、そしてイエス様に出会っていく、その様(さま)を互いに見つめるために、わたしたちは集められていると言うことができると思います。

今日も一人ひとりがイエス様に触れて、そして神様がお造りになった本来の自分自身の中にある恵みを見出していく歩みのために導きを願うと同時に、お互い同士の中にイエス様が働かれる、その思いをもって互いを見つめ合い、このごミサをご一緒にお捧げしていきたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/